

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- フェアトレード特集 地球の木がめざすフェアトレード …… 1
- フェアトレード特集 クラフトの産地カンボジアを訪問 … 2,3
- ネパール・スタディツアー …………… 4,5
- 支援地から ラオス、カンボジア …………… 6
- 気仙沼だより その17 …………… 7
- 地球の木と私 …………… 7
- 活動日誌(3月～5月抜粋) …………… 7
- あーすフェスタかながわ2017 …………… 8
- インフォメーション/新スタッフ紹介 …………… 8
- イベント情報 …………… 8
- 編集後記 …………… 8

地球の木がめざすフェアトレード

知っていますか？

「フェアトレード」という言葉を知っている人はどのくらいいると思いますか？日本フェアトレードフォーラムによる全国調査(2015年)によると、54.2%が言葉を見聞きしたことがあるという結果が出ています。特に近年では教科書に掲載されるなどの影響で、高校生や大学生の間での知名度が高くなっています。さらに同調査で「フェアトレードは貧困や環境に取り組む活動である」と答えた人の割合(認知率)は全体の29.3%であり、3年前の25.7%から3.6%上昇しました。また、同フォーラムと国際貿易投資研究所が行なった市場規模調査(2015年)では、フェアトレード商品の販売額合計は約265億円にのぼり、2007年の前回調査の73億円から8年間に3.6倍以上に伸びています。

地球の木のクラフトは…

このように「フェアトレード」が普及しつつある中で、会員同士の会話から漏れ聞こえるのが「地球の木のクラフト(手工芸品)はフェアトレードなの？」という疑問です。地球の木では、カンボジアやラオスで作られた製品を「幸せ分かち合いクラフト」として販売していますが、これをフェアトレードと言っているのか？ 答えはYESです。

そもそもフェアトレードとは何か？ フェアトレード製品の認証団体であるフェアトレードラベルジャパンによる定義では、「フェアトレードとは、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す貿易のしくみ」とあります。コーヒーやチョコレートなど製品ごとに詳細な認証基準があり、それらを満たすと認証ラベルをつけることができます。

一方、食品に比べて手工芸品は種類も多いために認証の仕組みが整備されておらず、手工芸品の場合にはその生産団体が国際的なフェアトレードの基準に沿って活動しているかどうかで判断する団体認証のシステム(WFTOへの登録)があります。しかし国際的な手続きが煩雑であるため、日本の団体の多くは登録



クラフトの展示販売(生活クラブみたけ台デポーにて)

していません。そこで、これらの認証は得ていないけれども団体独自のフェアトレード基準で活動している団体やその製品は「第三カテゴリー」とされ、地球の木の「幸せ分かち合いクラフト」はこれにあたります。

足元から社会を変える

「幸せ分かち合いクラフト」では、現地の生産者と購入する人、生産・販売に関わるすべての人が幸せになることを願い、現地の暮らしや伝統、文化を尊重した「手作り」のよさを生かした「ものづくり」を目指しています。その目的は①購入することによって生産者の生活を支える ②母から娘に受け継がれてきたアジアの「手作り」を紹介する ③経済至上主義の世界で経済的に力のある方がより利益を得て、弱い立場の人たちがより厳しい状況に置かれてしまう現状の貿易の構造的な問題を考えるきっかけとする、の3つです。「消費者」として支援するだけでなく、一つひとつ丁寧にものを作り、大切に使う社会を「選択する者」として、足元から社会を変えていく市民運動だと言えるのです。

(クラフトチーム 磯野 昌子)

(日本フェアトレードフォーラム理事、
逗子フェアトレードタウンの会事務局長)

—クラフトの産地カンボジアを訪問—

伝統の織物で生産者を支える

3月2日から6日まで、「幸せ分かち合いクラフト」の発注と生産現場の視察等を目的にカンボジアを訪問しました。生産者と地球の木をつなぐホ・チョムナップさんに焦点を当てて「幸せ分かち合いクラフト」を紹介します。

フェアトレードショップ

カンボジアの首都プノンペンの王宮の近くの通りに100メートルくらいにわたって、素敵なブティック、外国人向けのバーやカフェ、レストラン、雑貨店が並びオシャレな通りがあります。ガイドブックや現地では「St.240」と紹介され、外国人が多く集まるその場所は最先端のおしゃれの発信地でもあります。そのSt.240から路地を入ったところに新しくフェアトレードショップ「Cambodian Creations」がオープンしました。このショップの共同経営者の一人がホ・チョムナップさんです。

伝統的織物の復活のために

地球の木とチョムナップさんとの出会いは7年くらい前にさかのぼります。チョムナップさんは大学を出てからEUの支援でシルク製品を中心としたカンボジアの伝統的織物を復活させるプロジェクトにリーダーとして取り組み、5年にわたり村で、生産者たちと一緒に、ゴールデンシルクなどの糸の紡ぎから織り、染めなどの経験を積みました。そしてその後も、主にヨーロッパの人たちとの協働で、カンボジア各地の織物の産地を訪れ、各地で昔から受け継がれている伝統の織りを生かしながら、モダンなデザインなども取り入れシルク製品の生産・販売をしています。

シルク織物の大きな変化

内戦で、一度は壊滅的な被害を受けたカンボジアのシルクの復活にEUや日本をはじめ各国が大きな支援をしていましたが、カンボジアの復興・経済成長に伴い、カンボジアシルクの需要は外需から内需へと変化し、その支援も激減しています。シルク糸や人件費の高騰、カンボジア内の縫製工場の増加で織物をする人たちが減っていること、また、タイやベトナムなどから安価な機械織りの製品が輸入されることも多くなっている、シルク織物の生産・販売現場は大きく変わってきています。



藍染めをしているチョムナップさん

先を見据えて今を頑張る

チョムナップさんもこれまで2回、海外の団体の支援を受け、ショップを運営しながらシルク製品の生産、販売をしていましたが、今はその2度目のショップも支援が終了したため、月～金は他の仕事をしながら、週末をシルク製品の生産、販売に充てています。昨年の秋までは、自宅にショールームを作り、地球の木をはじめ、海外からの顧客に対応していましたが、この度、他の仲間と共同でフェアトレードのショップの開店へと至ったのです。彼は、カンボジア伝統の織物を大切にしたいと考えていて、品質を高めながら、自然染色などで付加価値を付けながら、生産者を支え、自分も生業としてやっていけるように頑張っています。それだけではなく、今後、仕事をしながらラッフルズ・インターナショナル大学でデザインやマーケティング・マネージメントを勉強しなおす予定もあるそうです。支援に頼ってはいけませんというのをその経験から学び、自らの力をつけ、先を見据えて行動していくために努力を惜しまない彼の姿に感銘を受けました。チョムナップさんは、現在は、Fairweavesという自然染色中心のシルク製品を扱うブランドを立ち上げていて、地球の木も昨年から、福祉クラブ生協の共同購入などでFairweavesのスクarfを生産してもらっていますが、チョムナップさんの製品は、品質の高さとデザインの良さで地球の木でも人気ブランドのひとつです。

技術の高い生産者が揃う島

今回も、チョムナップさんの案内で、昨年に引き続き織物の生産者を訪問することができました。プノンペン中心部からトンレバサック川にかかる日本-カンボジア友好橋(通称:日本橋)を渡り、さらに車が2,3台ほどしか乗ることのできない小さなフェリーでメコン川を渡ったところに、ダック島という島があります(メコン川の中州の島)。この島はシルクアイランドとも呼ばれていて、プノンペンからほど近いこともあり、古くから王室の織物も織っている地域でもあるとのこと。Fairweavesでは、自然染色の



生産者グループのリーダーの女性

デザインスカーフ、紋織スカーフ、ダイヤ柄ブランケットなど、織りの技術の高い生産者が揃っていて、その素敵な製品に日本から訪れた私たちは魅了されました。チョムナップさんは、ここ以外にも、カンボジア各地に製作を依頼できる生産者グループと繋がっています。そして、注文に応じて適した地域を選び、生産を依頼しています。アンコールワットがあるシムリアップは、シルク関係の工房も多く、技術が高いため、染色はシムリアップで行なうそうです。

信頼そしてみんなの笑顔へ

チョムナップさんとこのように、生産者を訪問するようになるまでに、3年くらいはかかりました。この仕事をする人にとって生産者を紹介することは非常にリスクなことです。優秀な生産者を横取りされる場合もあるからです。何度もショップを訪ねる



チョムナップさんと自宅のショールームで



フェリーでダック島へ向かう

うちに、製品の説明を聞き、いろいろと生産者の話も聞くようになり、生産者の訪問が実現したのです。私たち地球の木にとっても、クラフト製品を買ってくださる方や支援者の方々に、どんな人が作っているのか、どんな状況で生産しているのかを伝えるのはとても大切なことです。ただ、安いからといって何でも仕入れれば良いというわけではありません。生産者、そして、それをつなぐ人(ここでは、チョムナップさんや地球の木)、そして買ってくださる方すべてが笑顔になること、幸せになることが地球の木の「幸せ分かち合いクラフト」の目標だからです。皆さんも、ぜひ、この「幸せ分かち合いクラフト」へのご協力をよろしくお願いたします。(クラフトチーム 筒井 由紀子)

幸せ分かち合いクラフトのお求めは…

デポー販売の
有償ボランティア
募集中!

地球の木の幸せ分かち合いクラフトは、生活クラブ、福祉クラブの共同購入の他、国際協力のおまつりや地域のイベント、そして生活クラブのデポーでも販売しています。

国際協力と言うと普段は敷居の高い人もデポーの展示会販売では、「あら素敵」「これなに？」と気軽に寄ってきてくださる人も多く、地球の木の活動のこともお話しできる貴重な機会でもあります。時には「会員なのよ」と声をかけてくださる方もいて、それは、とても嬉しい瞬間です。現在、地球の木では、神奈川県各地域の方々に、さまざまな機会で開催への共感を持っていただけるような試みを始めています。デポー販売では「有償ボランティア」の制度も導入しました。会員の方限定で、お近くのデポーで5時間以上、ボランティアでお手伝いしてくださる方に御礼をするというものです。デポー近くの会員の方の力をお借りして、幸せ分かち合いクラフトの輪を少しでも広げていくことができるよう、関心がある方は、どうぞ事務局までご連絡ください。皆さまのご参加を心より、お待ちしております！

ローシルクとファインシルク

ダック島には、プノンベン郊外ということもあり、蚕から繭、糸紡ぎ、織りまで有料で見学できるショールームのような施設もあります。特に黄色のカンボジア固有種の繭＝ゴールデンシルクの説明、展示は非常に興味深いものでした。カンボジア原産のシルク糸は、手織で、黄みがかっているためゴールデンシルクとも呼ばれています。日本をはじめ中国やベトナムなどのハイブリッドの蚕の半分くらいと小ぶりなため、手織しかできないそうで、この繭から紡がれた糸はローシルク(粗いシルク)と呼ばれています。対して、ベトナム産のハイブリッド蚕の繭からとれる糸は、外側の粗い部分を取り除いて、機械で製糸されたもので、ファインシルク(滑かなシルク)と呼ばれています。日本では手織は、その風合いも好まれ、高価になりますが、カンボジアでは、逆で、手作業の方が安価なため、機械製糸で輸入品のファインシルクの方がやや高価になります。そして、光沢や柔らかさに加え、品質も安定しているため、ファインシルクが緋の材料としてもカンボジア市場では、主流を占めています。



ゴールデンシルクの繭

— ネパール・スタディツアー2017報告 — 「何かが変わる、ふれあいの旅」

ツアーリーダー 丸谷 士都子

「スタディツアー2017」のキャッチフレーズは、「何かが変わる、ふれあいの旅」。2月23日から3月3日まで、3名の参加者と2つの村を訪れました。村の人々の暮らしや生きる知恵に学ぶことと、大地震被災者支援の現場を視察し、住民や子どもたちと交流することが主な目的でした。

大地震の影響が残るそれぞれの村で、仮設シェルターに泊まり、家族の人たちとふれあい、高校生や女性グループと交流し、ヒマラヤ山脈や夜空の星に感動しました。埃に悩まされ、お尻が痛くなるほどのガタガタ道を車で移動し、辛いことも多かったとは思いますが、ただの観光ではない、人々の生の生活を体験することができた、そして考え込むことも多い旅だったことでしょう。それぞれの思いを抱いて帰国した参加者の言葉から「変化」を感じていただければ幸いです。

自分で体験する大切さ

桐ヶ谷 美春(大学生)



村の女性たちと桐ヶ谷さん

今回のツアーで、自分の目で見て感じる事が、本で読んだりテレビで見たりすることよりも何倍もインパクトがあり大切だということを強く感じました。知らず知らずのうちに日本の常識の中で生きているという発見にもなりました。

マンガルタル村のホームステイした地区には水道がなく、山道を往復20分程のところにある水路まで汲みに行っていました。私も同じ年くらいの子たちに誘われてついていきましたが、道が悪く彼女たちのようにさっさと歩けず、また、水の入った容器を持ち上げるのがやっとで笑われてしまいました。実際に体験できたことは良い思い出です。

ラパレパウフ村は水が豊かであるからか、緑が多く景色もよく開放的な印象を受けました。しかし、どちらの村も山の中にあり、舗装されていない道をカトマンズから何時間も行ったところにあります。道が良くなれば村人の生活も便利になると考えましたが、道が整備されると村の若者が都市部に出て行ってしまうと言い、インフラの整備が誰にでもプラスになるわけではないようで、開発の難しさを知りました。

日本のニュースや雑誌などをただ受動的に見ていても、アメリカや北朝鮮など、先進国や日本にとって関係度が高い国の二

ユースばかりで、ネパールのことはめったに取り上げられませんが、そうした中で、私は知っている気になっていたり、考えていなかったのだなということを実感するツアーになりました。これからも自分で体験することを大切にしていきたいです。

ヒマラヤの風に吹かれて

森 真太郎(社会人)

2つの村で女性グループとの交流がありました。そこでどうも差し出した手がスルスルリと抜ける感覚でどうにも交わらない状態に頭の中がなりました。それもそのはずだと後で分かりました。私が聞きたがっていたことは、彼女らが困っているであろう、いや確実に困っていて問題が山積しているという前提条件が自分の中にあっただけです。問題はさらに深くあります。その前提条件を持っていることに自分自身が全く気づいていなかったことなのです。当事者・支援する側が同等であるべき参加型のスタイルが、自分の方で知らず知らずのうちに上からの目線になっていたわけで、かみ合うはずありません。お互いを尊重すること、お互いを受け入れること、ごく当たり前のスタートラインに立てていなかったことに気づかされました。今回、そういう意味では猛省すべきことだと感じました。

それでも、SAGUNであったり、地球の木であったり、様々な



お相撲を紹介する森さん(左)

NGOが活動されているのはとても大きいとこれも同時に感じました。まずは今回のツアーで気づかされた点を自己改善しながら、また私自身も出直して、微力ながらいろんな活動に関わっていきたくと思います。

最後に今回のスタディツアーに関わってくださった全ての関係者に厚く御礼申し上げます。ダンネバード(ありがとう)!

自分への課題を見つけた

五十嵐 大輝(大学生)

私は大学で、国内外での農業の地域開発をテーマにしています。今回のネパール・スタディツアーに参加する目的は、ネパールでの開発の現場を実際に自分の足や目を使って、確かな情報を得ることでした。

ラスワ郡のラパレパウフという村は震源地に近く、村にはまだ地震で崩れた家などがありました。私がホームステイした家は新しく作ったものだったらしく、ヒビだけで済んだようでした。ホストファミリーに地震が起きた時の映像を見せてもらいましたが、土砂崩れの様子や、家の倒壊など様々で、東日本大震災を思い出すような映像でした。

女性たちに集まってもらって話を聞きました。そのグループは、女性や子どもの健康を改善することを目標として活動していて、その結果、家庭内暴力が減り、妊婦や子どもの死亡率が低下しているようです。

村での農業では、とうもろこしや、大豆やさやえんどうなどの豆類を多く扱っていました。無農薬で、肥料には牛糞とユリヤ(尿素)という有機化合物を混ぜて土に蒔いていました。虫の



五十嵐さん(左)のまわりにはいつも子どもたちが

被害を抑えるために火を焚いて、笠のようなものを被せて虫を誘い込んで繁殖を防止する工夫をしていました。この方法は無農薬で農業をするにあたってとても良い方法だと思いました。

今回のスタディツアーを振り返ってみると、自分に欠けている所やこれからの自分への課題がどんどん出てきます。自分の中間に表すのが難しいくらい濃い経験ができた10日間でした。私が思っていた支援されている開発の現場と実際の開発の現場は何か違って、まだ私はそれを理解できていません。また、高校生の頃から途上国というものにはこんな地域だろうと思っていた固定観念みたいなものは、やはり現地に行き答え合わせをしていくことが重要だと思いました。次にもしネパールに行くことがあるなら、今回は聞くことができなかった村での作物を作る手順を聞く事など、農業に関する視点で今回よりも濃く活動していきたいと思っています。

● 補助校舎が完成

ネパール大地震復興支援の一環として、かながわ国際交流財団の助成を得て、マンガルタル村の2つの小学校に2教室からなる校舎を建設しました。チャトレ・ピバル小学校の校舎落成式に参加しました。ここでは、一つの教室を低学年用に、もう一つを図書室とし、読書に力を入れる計画です。先生や生徒たち、地域の村人が集まって盛大な落成式が行われました。

来賓の挨拶の合間に子どもたちの踊りあり、カースト差別や飲酒への意識啓発を意図した寸劇があり、式は3時間ほど続きました。「小学校は地域の拠点」であることがよく分かるイベントでした。



儀式のろうそくを灯して小学校校舎落成式

● 地震の影響は今も色濃く

今回は、先生が多い地域でホームステイをしました。初日に2名が泊まったのは、小学校の校長先生ケサップさんの家で、娘さんが3人います。石造りの家はヒビが入って危険なため、トタンで作った仮設シェルターで暮らしています。そこに家族の皆さんと泊まりました。

この地区は、地震後に水脈が変わり、水が出なくなって

しまいました。今は、1日最低5回は水汲みにいきます。片道10分ほどの急な道ですが、水が溜まるまで待つと1、2時間かかるそうです。これは主に女性の仕事で、20~30キロの重さの水を運びます。水不足は作物にも影響が出ていて、深刻な問題となっていますが、女性たちは、どうせやるなら楽しくと、歌を歌いながら水汲みに通います。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)



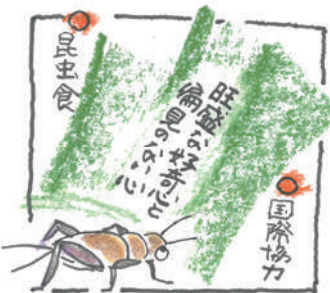
from Laos

昆虫食先進国のラオス

2013年5月にFAO(国連食糧農業機関)が昆虫食の推進を掲げた報告書を発表して以来、昆虫食の認知度は日に日に増しているようです。

現在の食肉生産のあり方は、土地利用、飼料効率、家畜が発するメタンガス、糞尿による土壌汚染…といった様々な問題から、「将来の長きにわたって持続可能とは言えない」という見方も強くあります。これに対し、低投入で飼料効率がよく、回転が非常に良い昆虫の養殖に注目が集まっています。

ラオスは昆虫食先進国で、人々は様々な虫を食べています。カメムシもなかなか美味ですが、この話をすると「え？臭くないの？」とよく驚かれます。でも、においが強いけど美味しい食べ物は少なくないですよ。強すぎるやつは美味しくない、とラオス人も言います。当たり前のことです



ね。コオロギは私も家で養殖しています。冷凍庫には常にストックがあり、油で炒めて最後に胡麻油をかけたら、ビールのつまみに最高です。

「見た目がグロテスクだ」と主張する人がいますが、サザエとかシャコとか、そんなに見目麗しいでしょうか。ラオス人は外国人が昆虫食に驚くのを面白がりますが、私はあえて言うことがあります。「日本人もいろいろなものを食べている。君らは日本に来たら驚くかもしれない。両方食べる僕が世界チャンピオン」

世界的に見れば、昆虫食より卵かけご飯のほうがよほど奇異なことです。中学生にこの話をして、「自分の好きな食べ物を、“気持ち悪い”と言われて嬉しいですか?」というと、「偏見はいけない」といった素直な感想を言ってくれます。子どもだから?でも、国際協力には「旺盛な好奇心と偏見のない心」が必須です。皆さんは素直な気持ちを失っていませんか?(笑)

(JVC ラオス事務所 平野 将人)



from Cambodia

深まるCWCCとの信頼関係

3月初めCWCC(カンボジア女性緊急救済センター)のプノンベン保護シェルターを訪問しました。

2016年度の活動報告と2017年度の計画について、代表のPokさんと意見交換を行いました。10月に寄贈した地球の木の支援金は、保護シェルターの運営費の他に、シェルターを出て新しい生活を始めるための資金、また、屋台を購入し果物の販売を始めたり、野菜を育て、加工して販売する事業を始めたりする資金として大切に使われたとの報告を受けました。いずれも、被害者の女性たちに寄り添った支援が、確実に彼女たちが前を向いて進んでいくための大きな支えになったということが分かりました。

CWCCでは、メインの資金提供者の方針で、現在プノンベンの保護シェルターの入居者は、18歳以下のレイプや児童買春の被害者が多くなっています。しかし、今回Pokさんとの話では、「CWCCとしては、従来のように家庭内暴力の被害者の女性たちも積極的に受け入れ、その回復、自立を助けたいと考えている。そして小さい資金でも、この趣旨に賛同してくれる支援者を探してい

る」とのこと。これは、女性たちが自立していく過程を支援していきたいという地球の木の意向ともしっかり合致するものです。

CWCCへの支援は3年目を迎え、CWCCとの信頼関係もかなり深まってきています。現地の状況を踏まえながら、2017年度は、引き続き自立に向けた支援と共に、女性たちへのインタビューや具体的な事例の報告なども行っていきたいと思っています。

(カンボジアチーム 筒井 由紀子)



CWCCのスタッフの皆さんと(左から植田、筒井、中央が磯野)

復興から発展への第一歩が...

気仙沼は現在、復興の真っ最中です。復興住宅や集団移転先の建設は8割がた終わり、引っ越しも始まっています。地球の木の皆さんと炊き出しや作業をした鹿折地域などは、2メートル以上の高上げをし、現在幾つかの工場や商店の建設も終わり、新工場や新店舗での営業も再開し始めました。

ただ、まだ高上げしている地域も多数あり、元の場所に戻りたい人たちはまだ仮設住宅での生活を送っています。中学校や公園などの仮設住宅はまだ設置されたままで、学生たちは狭いグラウンドでの運動を強いられています。

先日、気仙沼では復興から発展への一歩がお目見えしました。それは、気仙沼と大島をつなぐ橋が架かったことです。まだ、完成しておらず通行はできませんが、発展への一歩だと思えます。

震災時、大島は数週間孤立し水や食料にも苦労したと聞いています。橋ができることにより、震災時、空輸以外でも食料などの輸送や島民の避難などに期待できると思います。やっと気仙沼は復興と発展が目に見える段階に来たような気がします。皆さまの支援と応援のおかげでここまでやってきました。

まだ、完全な復興には時間がかかると思いますが、みんなで

復興と発展を頑張っていきます。今後とも、気仙沼を見守りつつ応援していただけると嬉しいです。よろしくお願いたします。
(Tree Seed 小野寺 大志)



気仙沼夜景-3本の光は、犠牲者への追悼と未来を照らす灯

地球の木の活動に参加することによって、どんどん私の生活は変化してきました。7年前、相模原で産地消に取り組む会員、山本さんの案内で、休耕畑を借りた農作物作りを見学させていただきました。たくさんの種類の野菜、小麦やお米まで作っているというのに驚いて、帰ってすぐに畑を探し始め、借りました。畑のまわりは染色の素材にあふれていることに気づきました。畑の端では日本茜を染色用に育てています。

次の年は、相模原市から長野県に移住して有機農業を実践している会員の北原さんのお宅を訪ねるツアーでした。なによりも魅力的だったのはふんわり暖かい薪ストーブでした。薪を作るための森にも案内していただきま

した。オフグリッドな生活は夢ですが、薪ストーブがあれば、それに一歩近づける気がしました。2年前に姉たちと共同購入(!?)した山小屋に取り付けた薪ストーブを姉たちも気に入っています。

去年、ネパールのカマルさんが来日し、私が染め物を教えている「ちえのわホーム」でも、仲間づくりを目指すワークショップが開かれました。参加した人たちが笑顔になっていくのを体験しました。次の週に、ネパールスタディツアーに参加されたことのある大家さんから、もう1軒貸家が空いたので染め物の家として使いませんかと言われて、待望の染色工房「アトリエ十色(といろ)」ができました。不思議なご縁というよりないです。(染色工房主宰 大藪 明恵)



活動日誌 (3月~5月 抜粋)

3月

- 2~6日 カンボジア訪問
(筒井・磯野・植田)
- 6・7日 デポー展示会(つつじが丘)
- 9・10日 出前講座
(東京都三鷹市立第四中学校)
- 11日 「災害をきっかけにした人づくりの国際支援」登壇
(丸谷・かながわ県民センター)
- 11日 デポー展示会(せや)
- 16日 第8回理事会

23・24日 デポー展示会(ひらつか)

30・31日 デポー展示会(ほんもく)

4月

- 3・4日 デポー展示会(みたけ台)
- 10日 デポー展示会(日限山)
- 15日 デポー展示会(東戸塚)
- 19日 第9回理事会
- 20日 デポー展示会(らいつたうん)
- 24・25日 デポー展示会(すすき野)
- 25日 監査

5月

- 8・9日 デポー展示会(東寺尾)
- 13日 出前講座
(横浜市立平楽中学校)
- 14日 ISOGOワールドパーク出店
(磯子)
- 15日 第10回理事会
- 20・21日 あーすフェスタかながわ2017
出店
- 25・26日 デポー展示会(緑園)
- 28日 第18回地球の木総会

あーすフェスタ かながわ 2017

チヂミ販売は ボランティア高校生との 二人三脚で



2017」(5月20・21日、本郷台あーすびらぎ)の屋台村イベントに例年のチヂミ販売で参加しました。また丸谷理事長は企画委

地球の木は、「みんなで育てる多文化共生」をモットーにした「あーすフェスタかながわ

員として多文化共生を考えるためのフォーラム部会に関わりました。チヂミ販売は、隣のブースの本場モノと競合するハンディがありましたが、初日は会報作成チームを主力とする主婦パワーで勝負、2日目は私立隼人高校国際語科の1、2年生男女6人が助っ人として参加してくれました。高校生ボランティアの大半が「チヂミを食べるのも作るのも初めて」と言う。しかし周囲の心配をよそに、笑顔の呼びこみと、飲み込みの良い手さばきを披露。そして一言「初めての体験でしたが、楽しかった」との感想でした。国際色豊かなこの祭りへの参加の意義を感じた2日間でした。来年はみなさんもぜひご参加ください。(理事 野崎 俊一)

INFORMATION

★地球の木のプログラムは、みなさまの会費と寄付で支えられています



事務局だより

パンフレットを改訂します

昨年度、一般財団法人日本国際協力システム(JICS)のJICS NGO支援事業の組織強化枠に助成金を申請しました。このたび申請が採択されたのをバネにして、広報媒体のリニューアルを始めました。地球の木の活動を知っていただくだけでなく、地球の木を知った方が次の一步を踏み出してもらえるような参加促進を目指しています。

中に居て活動していると自分たちの活動の意義を伝える「言葉」が凝り固まってしまうがちです。今回は、外部の協力者(ひとしずく株式会社)の力を借りて地球の木のメッセージをあぶりだし、最終的にはパンフレットやHPの改訂につなげていく計画です。

5月に入り、各チームでワークショップを開催。ここで聞き取りをしながら、活動に参加するメンバーの想いをメッセージに落とししていきます。パンフレットは10月頃に出来上がる予定です。どうぞお楽しみに！(地球の木事務局 下田 寛典)

新しいスタッフが入りました!

竹内 千佳(たけうち ちか) です



こんにちは、はじめまして。2月からクラフトチームにスタッフとして参加させていただいている、竹内千佳です。5年前、特に興味があったわけではないのですが、カンボジアに3ヵ月滞在することになり、訪れた首都プノンペン。最初は突然のスコールと一日に何度も起きる

停電に悩まされましたが、日本とは全く違う環境でたくましく生きる現地の人たちの姿に影響を受けて、気が付くと私も毎日裸足で走り回っていました。地球の木での活動を通してカンボジアに貢献できること、カンボジアと日本とのつながりをもっと強く、もっと深くできること、そして日本の皆さんにカンボジアの伝統的なシルク織物の魅力をお伝えできる機会をいただけたことを嬉しく思います。まだまだ勉強が足りませんが、いろんなことを学んで少しでもお役に立つよう努めたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

デポ一展示会

- | | |
|---------------|--------------|
| 6月1日(木)、2日(金) | デポ一展示会(ほんもく) |
| 4日(日) | ふくしまつり(磯子) |
| 14日(水)、15日(木) | デポ一展示会(南林間) |
| 16日(金)、17日(土) | デポ一展示会(東戸塚) |
| 22日(木)、23日(金) | デポ一展示会(宮前平) |
| 8月28日(月) | デポ一展示会(せや) |



◆フェアトレードの世界も複雑なようです。でも地球の木のクラフトも「第三カテゴリー」とやらでフェアトレードに入るそう、みんなで「よかった!」とホッとしました。ちょうど事務所にはカンボジアからの新製品が届いたばかり。全部誰かに届くといいな!(Y.N)

◆「遺伝子組み換えルーレット」という映画を観た。世界の種を支配しようとする極悪非道な米巨大種子企業、それに与する連邦政府のやり口に吐き気を覚えた。大きな力と戦う米市民。GMOのゴミ捨て場になると言われる日本。「食は直接民主主義」という言葉に一縷の希望を見た。(K.N)



特定非営利活動法人

地球の木